

平成7年(1995年)10月4日(水曜日)

# 巨大津波が何度も 仙台平野を襲った

仙台沿岸を襲った津波の歴史を研究している仙台市の郷土史研究家が「仙台平野の歴史津波」と題した本を出版、三日仙台市に寄贈した。過去にあった巨大津波の規模や被害などを古文書などから調査し、「大津波は百七十一百八十年ごとに起きる」とユニークな説を展開している。

本を出版したのは宮城野区蒲生二丁目の飯沼勇義さん(六八)。歴史上の巨大津波に興味を持ち、四十年ほど前から歴史書など資料を収集していたという。

平安時代初期の貞観津波(八六九年)や江戸時代の慶長津波(一六二一年)、寛

仙台の郷土史研究家・飯沼さん

## 歴史まとめ一冊に 「周期は170—180年」

況について説明している。このほか、約千三百年前の飛鳥時代には、記録のない大津波が仙台平野を襲ったことを指摘。この時代に太白区郡山にあった宮衙(かんが)が多賀城に移されたことを根拠に挙げ、「津波の被害を受けたため、高台の多賀城に移築された」と推測している。

これらの研究成果から、巨大津波の発生周期を「百七十一百八十年」と仮定し「寛政津波から二百年以上たった今、いつ巨大津波が起きてもおかしくない状況だ」と結論付けている。

飯沼さんは「この本を通して津波の恐ろしさを理解してほしい。高台に避難ビルを建設したり、防潮林を増やすなどの対策も必要ではないか」と話している。

「仙台平野の歴史津波」はA5判、二百三十四頁。二千部発行され、市内の主な書店で販売している。千五百円。

「仙台平野の歴史津波」を出版した飯沼勇義さん



政津波(一七九三年)など、これまで仙台平野を襲った津波を紹介。規模や被害状